論　文

中学生はスクールカウンセリングを利用しているのか？

―― 心理主義化する現代日本社会における中学生の悩みとその相談先 ――

小　針　　誠
現代社会学部・現代こども学科

Abstract

The purpose of this study is to analyze the troubles and consultation of junior high school students based on a questionnaire, from standpoint of their attributes, relationships, psychological knowledge, etc. Since the '90s, to aid children with emotional problems, school counselors have been actively introduced and the budget is increasing. But the number of children who consult school counselors has not been revealed empirically.

The following facts have been shown through a series of analyses.

Most students with problems consult not the school counselor but their parents, friends and teachers who are familiar to them. Second, students who belong to the lower academic grade or track have no one to consult, including school counselors. School counselors have been introduced in increasing numbers, without regard to the realities of schools.

1．は　じ　め　に

（1）　問題関心

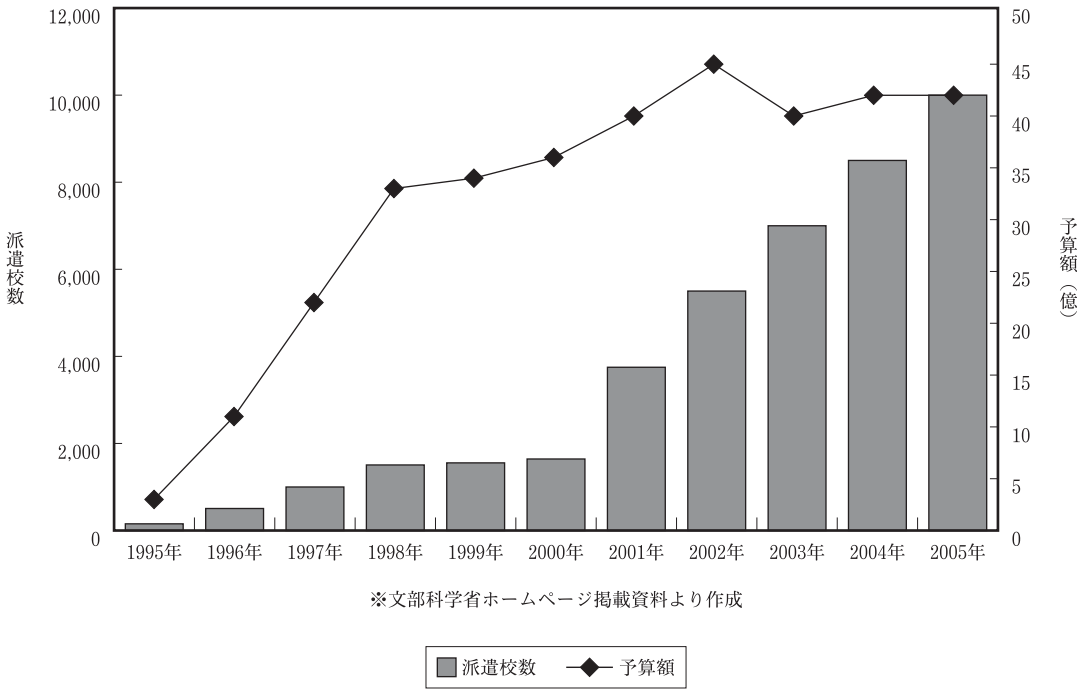
本研究の目的は、中学生を対象とした質問紙調査の分析を通じて、中学生の悩みの有無とその相談先について、諸属性、人間関係、心理学的知識の有無など様々な観点から分析し、その問題点を明らかにする。

これまで中学生に関する「悩み」の実態については、筆者の管見する限り、心理学研究を除いて、必ずしも積極的に調査研究がおこなわれてきたわけではない。子どもの「悩み」に対して（仮に些細なものであったとしても）できるだけ早くその要因を解明し、大きな問題に発展する前にそれを根絶・克服すべきであるとする臨床（医療化）の対象となっている昨今、子どもたちの「悩み」の実態やその相談先を含めて、十分に実態解明がなされていないようにおもわれる。

教育や社会の心理主義化の諸問題を比較的早い時期から批判してきた小沢（2002）によれば、心理主義は生活世界全体の問題を「こころ」の問題として切り離して考える昨今の社会的傾向を指し、その心理主義化の最たる形が臨床心理士などのカウンセラーの導入と普及であり、そこでは新しい人間管理がはじまっているという[1]。

これは学校教育の現場においても例外ではない。「スクールカウンセラー」（以下 SC）[2] という形で／と呼ばれる「専門家」が学校に入り、学校によって名称は異なれども、「こころの相談室」などと呼ばれるカウンセリング・ルーム

Do Junior High School Students Receive Schoolcounseling？：On the Troubles and Consultations of Junior High School Students in the "Psychologized" Society of Contemporary Japan



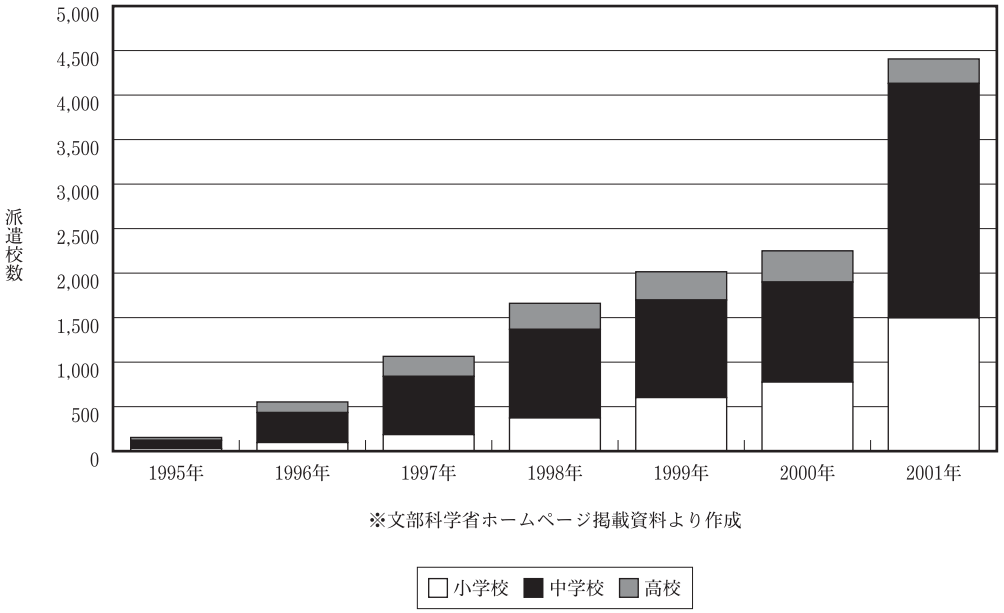
〔図 - 1〕　スクールカウンセラーの予算額と派遣校数（1995 年度～ 2005 年度）

で、子どもたちの「こころの悩み」の相談に応じ、休み時間や放課後には子どもたちへの声かけなども含めて、日常的な場面での相談活動を行うことが期待されるようになった。

この背景には、少年犯罪、いじめ自殺、不登校、学級崩壊など様々な子どもたちの諸問題（病理）を「こころ」の問題として捉える傾向が昨今とみに強くなっていることが挙げられよう。そうした「こころの問題」に対する処方として、SC に対する期待も高まりを見せるようになった。学校・子どもをめぐる諸問題・諸動向を反映するかのように、SC に対する国の補助予算額は増大していくことになる。〔図 - 1〕にあるように、文部省（当時）による「スクールカウンセラー活用事業補助」[3] は、導入初年度の 1995（平成 7 ）年には配置校 154 校（小・中・高校計）、予算額 3 億円でスタートした。導入の背景のひとつには前年 94 年 11 月に愛知県西尾市で起きたいじめ自殺事件にあったと考えることができる。

以後、配置校や予算額ともに増額され、10 年後の 2005（平成 17）年度には派遣校 10,000 校、予算額も 42.2 億円までに増大している。わずか 10 年間で SC 配置校は 65 倍に、予算額も 14 倍に増えたのである[4]。文部省（文科省）の長い歴史においても、単独の事業がこれほど急速に拡大し、予算が増額された例は過去にないという。

また、同図からは 1997 年から 98 年、そして 2000・01 年から 02 年の計 2 回にわたって、他の年度と比べて予算の増額や SC 派遣校数の増加の著しい年度が見出せる。1997 年は、神戸連続児童殺傷事件（酒鬼薔薇少年による児童連続殺傷事件）を受けて、2000 ～ 01 年は 17 歳の少年らが相次いで殺人、強盗、バスジャックなど相次いで凶悪犯罪を起こしたことから、「キレる 17 歳」という言葉がテレビ、新聞、インターネット上を賑わし、その存在が注目されるところとなった。いずれも、青少年による凶悪犯罪の発生を背景に、問題の撲滅の予防を目



〔図 - 2〕　スクールカウンセラー学校段階別・派遣校数（1995 ～ 2001 年）

的として SC が積極的に導入された。このように青少年の凶悪犯の報道合戦がそのまま予算の増額や派遣校数に反映されたといえるだろう。

しかしながら、SC に対する増加する予算額や派遣校数に対して、学齢期の子どもたちは「こころの専門家」である SC を相談先として利用しているのだろうかという問題がある。

当の SC たちは自らの学校での存在理由について以下のように述べる。

> 生徒向けには「よろず相談」としておき、どんなささいな相談でも来てもらっておいた方がよいようです。その時々のちょっとしたつまづき、挫折をとりあげていくことでも大きな問題に発展していくのを防ぐことができるからです。「もう少し早く相談相手がいればこのようなことにはならなかったのに」という残念な事件（いじめ自殺事件）が近年報道されたり、個人的に耳にすることも多く、生徒が危機に瀕する前に気軽に相談できる場が必要だと痛感されます。そのためにはふだんから敷居が高くない場所として「相談室」が生徒に認識されている必要があります（阿部 1998：56）。

以上のような内容から、SCや「相談室」とは生徒が気軽に相談できる敷居の低い場所であり、「些細な悩み」が「大きな問題」に発展する前に相談に訪れる場所であるべきとの認識が示されている。

とりわけ中学校の派遣が多いことからもわかるように〔図 - 2〕、中学生こそ、悩みやこころの問題のターゲットとして捉えられているように見える。その中学生たちは SC や「相談室」を利用しているのだろうか。あるいは、中学生は SC の存在をどのように捉えているのだろうか。もっといえば、SC は悩みを抱えるすべての中学生にとって「救いの手」となりえているのだろうか。そこには属性による差はないのだろうか。さらに文科省の教育政策において、政策期待ないしは税金の投入額に見合った十分な効果があるのだろうか。後述するように、非常に多額の税金が投入されていながら、その政策効果・評価についての実証的な検証はこれまで

ほとんどなかったといえる[5]。

（2） 調査データの概要

本研究で使用するデータは、中部地区Ｐ県の中学２年生 1094 名を対象とした質問紙調査「現代の中学生の日常生活と人間関係に関する調査」である。本調査は、筆者がＰ県の中学校６校（公立中学校４校・私立中学校２校）に調査を依頼し、2006 年 12 月から１月にかけて実施した。Ｐ県は大都市地域と非都市地域が混在しており、産業集積率の高い地域である。そのため首都圏への進学・就職等を考えなくても、地元で可能なため、地元志向は極めて高い。

サンプルは、Ｐ県の特性を活かして、大都市圏、中都市圏、町村からそれぞれ抽出、その大きさ（サンプル・サイズ）は 1150 票、有効回答数は 1094 票（回収率 95.1%）であった。なお、回答者の男女比は男子 50.0%、女子 49.9%（無回答・不明 0.1%）とほぼ同数であった。

調査項目は、性別をはじめとする基本的な属性、本人の学校生活（学業成績・部活動・進路希望）、メディア接触（新聞、読書、インターネットの利用状況）、人間関係（親子関係・友人関係）、社会意識や将来の希望・不安、親の教育意識・態度や通塾の有無・回数などを含んでいる[6]。

２．悩みの有無

（1） 中学生の悩みの実態と分析方法

本調査では中学生の悩みの有無に関して、①「将来の進路」、②「現在の学校での成績」、③「友達との関係」、④「先生との関係」、⑤「親子関係」の５項目について尋ねた。いずれも中学生にとって身近な問題であり、悩みの原因そして相談相手を求める内容であると考えられるものである。そのなかでも①②は成績や進路に関連する項目として、③④⑤は人間関係に関する項目として、それぞれ分類することができるだろう。

それぞれの単純集計結果（「悩みがある」と回答した者の割合）は、「現在の学校の成績」（60.8%）、「将来の進路」（57.2%）、「友だちとの関係」（25.6%）、「親子関係」（15.4%）、「先生との関係」（13.3%）である。中学校２年生という段階にあっては、友人・親・教師などの人間関係よりもむしろ、成績やそれと関連する進路に関する悩みを抱えているといえる。

分析は悩みの有無（ある＝１、ない＝０）を従属変数としたロジスティック回帰分析を用い、その要因について明らかにする。そのために以下の独立変数を投入した。

第一にそれぞれの中学生の諸属性に関する変数である。性別（男女）、学力（学校の勉強の理解度として「わかる」「だいたいわかる」「わからない」）、学校種別（公立中・私立中）、学校の所在地（大都市圏・市部・町村）を投入した。最近行われた調査研究（たとえば、ベネッセ総研 2001）が明らかにしたところによると、悩みの種類に若干の差こそあれ、性別では男子に比べて女子が、学力別では上位より下位の中学生ほど悩みを抱える傾向がある。

第二に、人間関係に関する諸変数である。親しく話す友人の数（０～３人、４～６人、７人以上）、悩みを相談する友人の数（０～１人、２～３人、４人以上）、一日あたり親子で話す時間（０～10 分、10 ～ 30 分、30 ～ 60 分、60 分以上）を投入した。友人や親とおしゃべりをしたり、悩みを相談しあうような人間関係が構築されていれば、それだけ個々の悩みも解決している可能性があるだろう。

第三に、昨今の心理還元主義を象徴する現象に関連して、アメリカ精神医学会刊行の『精神障害の診断と統計の手引き』（DSM-Ⅳ：Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Ⅳ）に掲載され、しばしば現代の日本でも人口に膾炙される用語（以下、心理学的知識）への認知に関する変数（得点）を投入した。精神分析と心理主義との関連については、森（1994）が詳しく論じているように、フロイトをはじめとする「精神分析的パースペクティブ」は社会に広く共有されることによって「心理学的社会」が成立していると考えられるから

である。この指摘にしたがえば、私たちがしばしば用いる精神分析学的用語は「こころ」そのものや「こころの問題」の理解に貢献するという心理（学）的還元主義と密接に関連していると考えることもできるだろう。

調査票では、トラウマ（心的外傷）、クライアント（心の悩みを相談する人）、サイコパス・ソシオパス（精神病質）、アダルト・チルドレン（アルコール中毒家庭で育った子ども）といった4つの用語について、正解と「聞いたことがない」を含めた選択肢をそれぞれ5つずつ用意し、全て正解した場合4点～全く正解のない場合0点まで得点化した。なお、4点（1名・0.1%）、3点（29名・2.7%）、2点（144名・13.2%）、1点（606名・55.4%）、0点（314名・28.7%）であった。

一般に個人の様々な問題を「心理主義的知識」によって、個人のこころのあり方としての「悩み」に変換・還元している（心理還元主義）ことも考えられる。たとえば、親子関係や友人関係の行き詰まりを、広く社会的な諸関係の問題としてではなく、それを自己の「こころ」のあり方に求め、個人の悩みとして表出させている可能性があると考えられる（森2000）。

モデル1は主に生徒の基本的な諸属性、モデル2はモデル1の諸属性に加えて人間関係に関する変数（友人関係・親子関係）を投入したモデル、モデル3はモデル2に先の心理主義的知識の有無を加えた分析枠組みである。

（2） 将来の進路に関する悩み

〔表-1〕は将来の進路に関する悩みの規定要因に関するロジスティック回帰分析の結果である。

モデル1と2で共通して認められた結果は諸属性の強い影響である。性別で見た場合、男子に比べて女子で悩んでいる傾向があり、学力別に見ても「学校の授業がわかる」や「だいたいわかる」と回答したものはそうでないもの（「わからない」と回答したもの）と比較して将来の進路に悩まない傾向がある。特に女子は男子に比べて1.83倍（Exp（6.03）＝1.8276）の確率（オッズ）で将来の進路に悩んでいることを示す。また、学校の授業理解度別に見ても「よくわかる」者のほうがそれ以外に比べて、1.94倍の確率で悩まない傾向があるといえる。これは実際の学力と相関しているだろうから、学力の高いものほど将来の進路展望がはっきりと見えていることを示しているものと考えられる。将来の進路希望と学力をクロスさせてみても、学校の授業がよくわかる学力の高い中学生は「未定者」が13.6%に対して、「だいたいわかる」になると19.4%、さらに「わからない」者は23.4%にまで上昇していることと関連があると見てよいだろう。また、学校の立地別（地域別）に見ても大都市部や市部の中学生ほど、そうではないものと比較して悩みを抱えない傾向が窺える。

また、モデル2で投入した親しくおしゃべりをする友達や悩みを相談する友達の有無やその数、あるいは親子関係に関する変数を投入・統制した場合でも、諸属性の影響は残りつづけている。逆に言えば、人間関係に関する変数は将来の進路への悩みの有無に影響をほとんど与え

〔表-1〕「将来の進路」に関する悩みの規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル1 B	モデル2 B	モデル3 B
男性	-0.603 ***	-0.592 ***	-0.556 ***
学力（わからない）			
わかる	-0.661 **	-0.649 **	-0.694 **
だいたいわかる	-0.345 *	-0.341 *	-0.347 *
公立中	0.357	0.354	0.382
地域（町村）			
大都市	-0.572 *	-0.577 *	-0.532 *
市部	-0.558 *	-0.549 *	-0.491 *
おしゃべり友（7人以上）			
0～3人		0.216	0.230
4～6人		-0.032	-0.050
悩み相談友（4人以上）			
0～1人		0.106	0.060
2～3人		0.122	0.100
親と話す時間（60分以上）			
0～10分		-0.134	-0.138
10～30分		0.212	0.240
30～60分		-0.311	-0.317
心理主義的知（3点以上）			
0点			-0.298
1点			0.077
2点			0.040
切片	1.159 ***	1.113 **	1.097 *
-2対数尤度	1407.837	1379.677	1373.259
サンプル数	1076	1063	1063

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

ていない。これは心理主義的知識の有無に関する変数を投入したモデル 3 についても当てはまり、将来に関する悩みは生まれ落ちた諸属性に大きく規定されていると考えられる。

それはまた将来の進路に対する展望が属性によって規定される可能性を含むものである。女子、学力の低い者（その背後には出身階層による格差・不平等の可能性も示唆される）、そして地域別には、大都市圏に比べて町村部のほうが進学や就職で大きな困難を伴っており、そうした地域社会の状況がそのまま中学生の悩みとして反映されているのかもしれない。

（3） 現在の学校での成績

〔表 - 2〕は「現在の学校の成績」に関する悩みの規定要因を同様の変数で分析した結果である。この分析結果は先に示した「将来の進路に関する悩み」とほぼ重なるといえよう。

そもそも現在の成績で悩んでいる者のうち 78.0%は将来の進路にも悩んでおり、逆に成績で悩んでいない者の多く（61.5%）は将来の進路でも悩みをもっていないのである。このように、現在の成績で悩む者の多くは漠然と将来の進路においても不安を抱いているといえよう。とりわけ町村部の公立中学生で、学校の授業がわからないと回答したものに、この傾向は顕著にあらわれている。

また、人間関係に関する変数に比較して、諸属性のほうが規定要因としては大きく、人間関係に関する諸変数はほとんど影響力をもたない。とりわけ現在の学校の成績に関する悩みという点からも、学校の勉強に対する理解度と大きな相関があり、変数が増えていくモデル 2 やモデル 3 においても、その影響力はほとんど小さくならず、オッズも非常に高い。たとえば、モデル 1 からモデル 3 を通して、「学校の勉強がよくわかる」と回答したものはそれ以外の者と比較して、6.3 倍～ 6.6 倍の確率で学校の成績で悩んでいないことが示された。

地域別に見ても、市部の中学校に通うものはそれ以外の地域の者と比べて、「学校の勉強がよくわかる」と回答したものはモデル 1 やモデル 2 ともに 1.6 倍程度の確率で悩んでいない。ここにも学力（授業の理解度）と成績に関する悩みとの関連や階層差の可能性も示唆される。

〔表 - 2〕「現在の学校の成績」に関する悩みの規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル 1 B	モデル 2 B	モデル 3 B
男性	-0.186	-0.124	-0.087
学力（わからない）			
わかる	-1.840 ***	-1.846 ***	-1.902 ***
だいたいわかる	-0.963 ***	-0.948 ***	-0.957 ***
公立中	0.225	0.172	0.205
地域（町村）			
大都市	-0.432	-0.509	-0.467
市部	-0.487 *	-0.478 *	-0.422
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人		0.426	0.443
4 ～ 6 人		0.344	0.330
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人		-0.296	-0.349
2 ～ 3 人		-0.279	-0.307
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分		-0.113	-0.122
10 ～ 30 分		-0.198	-0.171
30 ～ 60 分		-0.183	-0.186
心理主義的知（3 点以上）			
0 点			-0.302
1 点			0.044
2 点			0.149
切片	1.560 ***	1.113 **	1.757 **
- 2 対数尤度	1340.366	1320.478	1314.319
サンプル数	1064	1064	1064

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

（4） 友人関係の悩み

これまでは主に将来の進路や学校の成績に関する悩みであったが、以下は人間関係上の悩みである。まず「友人関係の悩み」を規定する要因について、同様の方法を用いて明らかにした〔表 - 3〕。

友人関係の悩みは、モデル 1 でも、変数を増やしたモデル 2 やモデル 3 においても、諸属性の一部（性別および学力）と友人関係に関する変数（親しくおしゃべりをする友達・悩みを相談する友達）が有意であった。

すなわち、モデル 1 では、女子のほうが男子に比べて約 2 倍（オッズ比 1.86）の確率で、学力別にはこれまでの進路や成績とは異なって、むしろ「学校の授業がよくわかる」（オッズ比 2.51）や「だいたいわかる」（同 1.40）と回答したもののほうがそれぞれの確率で友人関係に関する悩みを持たなくなる傾向が見てとれる。

これは学校の授業が「わかる」（13.8％）や「だいたいわかる」（24.6％）よりも「わからない」と答えた者（31.7％）のほうが友人関係に対する悩みを吐露していることからもわかる。

また、友人関係の悩みにおいて、最も特徴的なのは「友人の多寡」である。ここでは「親しくおしゃべりをする友人」（軽い友人関係）と「悩みを相談する友人」（重い友人関係）という友人のタイプを二種類にわけて、それぞれのタイプの友人の多寡によって、それぞれの悩みの有無を検討している。

親しくおしゃべりをする友達の数については、モデル２もモデル３も共通して「０～３名」という友人数の少ないカテゴリーで多くの悩みを抱えていることがわかる。オッズ比をみると、「０～３名」のカテゴリーはそうではないものと比較して2.67倍（モデル２）、2.66倍（モデル３）の確率で友人関係の悩みをもっているといえる。このことは単純集計結果からも裏付けられる（７人以上：19.8％＜４～６名：30.9％＜０～３名：48.8％）。

また、悩みごとを相談する友人の場合でも「０～１人」という少ないカテゴリー、「２～３名」程度のカテゴリーでも悩みの有無を有意に規定している。とりわけ「０～１人」というカテゴリーでオッズ比が高く、モデル２およびモデル３ともに2.5程度である。なお、単純集計は４人以上：16.3％＜２～３人：27.3％＜０～１人：38.9％の通りである。

おしゃべりや悩みの相談にしろいずれの付き合い方であれ、友人が多いほど、悩みをもつものが少ないといえるのである。このことから「友人関係の悩み」は、親しくおしゃべりをしたり、悩みごとを相談する友人がいない／少ないことに対する悩みとして捉えることができそうだ。

〔表 - 3〕「友人との関係」に関する悩みの規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル１ B	モデル２ B	モデル３ B
男性	-0.621 ***	-0.594 ***	-0.596 ***
学力（わからない）			
わかる	-0.920 **	-0.885 **	-0.891 **
だいたいわかる	-0.340 *	-0.321 *	-0.319 *
公立中	0.096	0.231	0.25
地域（町村）			
大都市	-0.096	-0.014	0.007
市部	0.203	0.370	0.390
おしゃべり友（7人以上）			
０～３人		0.981 ***	0.977 ***
４～６人		0.339	0.330
悩み相談友（４人以上）			
０～１人		0.943 ***	0.935 ***
２～３人		0.411 **	0.407 **
親と話す時間（60分以上）			
０～10分		0.103	0.121
10～30分		0.046	0.063
30～60分		0.174	0.173
心理主義的知（３点以上）			
０点			-0.483
１点			-0.380
２点			-0.466
切片	-0.601	-1.564 ***	-1.187
- 2 対数尤度	1191.016	1108.323	1107.056
サンプル数	1073	1060	1060

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

（５）　先生との関係

中学生は朝から夕方まで学校で一日の大半を過ごすため、当然のことながら友人のみならず、教師と関わる機会も多い。そのため、教師とのインタラクションにおいて、悩みが生じる場合もあるだろう〔表 - 4〕。

属性のみを投入したモデル１では、学力のうち「だいたいわかる」と回答した者は約２倍近く（1.94）の確率で、悩みをもつものは少なくなる。単純集計を見ても、「わかる」（10.1％）や「だいたいわかる」（10.6％）と比較して「わからない」（18.9％）で悩みを抱えるものが多い。学業という業績主義に一元化された評価の構造のなかで、学校の授業がわからない者は教師とのかかわり方に悩み、あるいは引け目のようなものを感じているのだろうか。

学力よりもむしろ地域、とりわけ「大都市圏」の中学生がそれ以外の地域の中学生と比較して悩みをもつことが少ない（オッズ比2.66倍と比較的高い）。私たちのイメージと異なり、実際には大都市圏よりも市部や町村部のほうが悩みを抱える中学生が多い。

モデル２やモデル３に注目すると、学校種別（私立か公立か）の変数が負の関連があることを示している。すなわち、公立中学校に比べて私立中学校の生徒のほうが教師との関係において悩みを抱えているものが多いということであ

〔表 - 4〕「先生との関係」に関する悩みの規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル 1 B	モデル 2 B	モデル 3 B
男性	0.041	-0.076	-0.110
学力（わからない）			
わかる	-0.672	-0.616	-0.593
だいたいわかる	-0.661 ***	-0.595 **	-0.588 **
公立中	-0.659	-0.693 *	-0.681 *
地域（町村）			
大都市	-0.978 *	-0.913 *	-0.934 *
市部	-0.063	0.009	-0.011
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人		0.412	0.397
4 ～ 6 人		0.006	0.004
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人		0.218	0.242
2 ～ 3 人		0.091	0.099
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分		0.989 ***	1.009 ***
10 ～ 30 分		0.245	0.263
30 ～ 60 分		0.188	0.204
心理主義的知（3 点以上）			
0 点			-0.316
1 点			-0.558
2 点			-0.334
切片	-0.572	-1.055 *	-0.616
- 2 対数尤度	828.707	800.653	798.383
サンプル数	1072	1059	1059

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

〔表 - 5〕「親子関係」に関する悩みの規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	モデル 1 B	モデル 2 B	モデル 3 B
男性	-0.273	-0.560 **	-0.563 **
学力（わからない）			
わかる	-2.036 ***	-2.036 ***	-2.036 ***
だいたいわかる	-0.717 ***	-0.574 ***	-0.578 **
公立中	-0.298	-0.356	-0.360
地域（町村）			
大都市	0.043	0.200	0.191
市部	0.276	0.479	0.467
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人		0.354	0.354
4 ～ 6 人		-0.280	-0.273
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人		0.399	0.401
2 ～ 3 人		0.150	0.149
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分		1.314 ***	1.304 ***
10 ～ 30 分		0.222	0.212
30 ～ 60 分		-0.310	-0.309
心理主義的知（3 点以上）			
0 点			0.290
1 点			0.186
2 点			0.32
切片	-1.001	-1.519 **	-1.730
- 2 対数尤度	889.268	813.000	812.463
サンプル数	1065	1052	1052

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

る。

また、人間関係上の変数でいえば、1 日あたり「親と話す時間」が極端に短いもの（0 ～ 10 分）ほど、先生との関係で悩みを抱える者は多くなるという結果も明らかになった。0 ～ 10 分の者で 24.3％に対し、10 ～ 30 分で 12.7％、30 ～ 60 分で 11.9％、60 分以上になると 9.8％にまで減少する。なお、学力（学校の授業の理解度）と親と話す時間は相互に独立（p ＝ .083）であるが、地域別に見た親と話す時間は有意な関係にあり（p ＝.012）、大都市圏の中学生ほど親との会話時間が長い。

（6） 親子関係

親子関係の分析結果については、〔表 - 5〕の通りである。

モデル 1 を見る限り、学力でのみ負の有意な関係が示されたに過ぎない。これまでの分析結果と同様に、学校の勉強が「わかる」場合は悩みをもたない確率が 7.7 倍にまで上昇する。「だいたいわかる」場合は 2.05 のオッズである。なお、単純集計でも学校の勉強が「わかる」（3.7％）や「だいたいわかる」（13.0％）に比較して、「わからない」（23.3％）と答えた者のほうが悩みを抱えている。

モデル 2 やモデル 3 でも学力の影響は変わらず、オッズ比を見ても非常に大きな影響力をもっていることが明らかである。また、注目すべきはモデル1では有意ではなかった性別が負の相関を示すようになっている。女子は男子に比べて 1.75 倍の確率で親子関係の悩みを抱えているということである。

また、親子関係の悩みは、日常の親子関係（一日どれだけ親子で会話をするか）を直接反映した結果だといえる。とりわけモデル 2 やモデル 3 を見ても明らかなように、1 日の会話時間が極端に少ない（0 ～ 10 分）ほど、明らかな負の関連が見られた（オッズ比はモデル 2 で 3.72、モデル 3 で 3.68）。親子の会話時間の違いから親子関係に悩んでいる者の割合を見ても、60 分以上：12.7％、30 ～ 60 分：9.3％、10 ～ 30 分：14.0％に対して、0 ～ 10 分という最も少ない場合になると、32.6％と群を抜いて圧倒的に高い。親子の会話に十分な時間を確保できないために、親子の関係性が十分に確立し得ない、その結果として親子関係に悩んでいるとい

う実態を反映しているようにおもわれる。

以上、悩みを基本的な属性や友人関係を独立変数に分析してきた。

それぞれの悩みによって規定要因が異なることは明らかであるが、以下小括を試みたい。

第一に、中学生の属性が少なからず悩みの有無に大きな影響を与えていることが挙げられる。

進路や学力に関する悩みでは、学力（学校の授業の理解度）が大きな規定要因になっており、学力が高いものに比べて、低いもののほうが悩む確率が高まる。また、地域別に見ても大都市圏や市部のほうが町村部と比較して悩む中学生が少ない。本調査研究では直接質問項目に入れているわけではないが、社会階層の影響も示唆される。つまり、高階層の者が多い大都市圏・市部あるいは子どもの学力が高いものほど、悩む確率が低減するということである。また、人間関係（友人・先生・親子関係）の悩みでも「学力」の影響がいずれも大きいことが示された。悩みの傾向は先の進路・成績関連の悩み同様、学力の低い中学生ほど、悩むことになる確率が高まるのである。

第二に、友人関係の悩みであれば、友人との付き合い方や数、親子関係なら親子のかかわりなど、それぞれの悩みの対象との関わりによって、悩む確率は大きく変動する。つまり、親しくおしゃべりをする友人や悩みを相談する友人が多いものほど、あるいは親子で話をする時間が長いものほど、悩む確率は低くなる。

第三に、心理主義的知識の有無は悩みの表出とは直接関係ない。すなわち、中学生は、心理主義的な知識の多寡とは関係なく、それをもって自身に関わる様々な問題を、「悩み」として解釈しているわけではないのである。

次章では、本章で得られた知見と関連させつつ、その悩みの相談先について分析したい。

3．悩みの相談相手

（1）　中学生の悩みの相談先

さらに「悩みがある」と回答した場合には、サブ・クエスチョンとして、その相談相手についても質問項目を設けた。相談相手として挙げたのは、「誰にも相談しない」、「親」、「きょうだい」、「先生」、「友だち」、「カウンセラー」[7]、「その他」の 7 項目である。

〔表 - 6〕　悩みの相談先（複数回答・%）

	将来の進路	現在の成績	友人との関係	先生との関係	親子関係
1	親 58.3	親 41.7	友達 42.9	友達 39.0	相談せず 50.6
2	友達 30.0	相談せず 31.6	相談せず 36.1	相談せず 35.6	友達 28.6
3	相談せず 24.4	友達 28.3	親 22.1	親 26.7	親 8.9
4	先生 11.8	先生 11.4	先生 7.5	その他 7.5	きょうだい 8.9
5	きょうだい 9.4	その他 7.7	きょうだい 4.6	きょうだい 6.2	その他 6.5
6	その他 4.2	きょうだい 6.3	カウンセラー 3.9	先生 5.5	カウンセラー 3.6
7	カウンセラー 1.1	カウンセラー 1.2	その他 2.9	カウンセラー 4.8	先生 2.4
計	139.2	128.2	120.0	125.3	109.5

※「悩みあり」と答えたもののうち、悩みの相談先として回答した割合。

参考までに、2006（平成 18）年 3 月に実施された内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」によれば、困ったことや悩みの相談先として、カウンセラー・相談員を挙げた割合は 1.2%でしかない。もっとも 10 年前の平成 7（1995 年）年に同調査を実施した際に、利用率はわずか 0.2%だったことを考えると、6 倍にも増えているともいえる。このようにこれまでの研究においても、カウンセラーがほとんど利用されていないことが明らかになっている[8]。

本研究においても同様の傾向を示している。〔表 - 6〕は先の質問で「悩みがある」と回答したもののうち、悩みの相談先として回答した割合（複数回答）である。いずれの悩みに関しても、順位こそ異なれども、「親」「友達」「相談せず」が上位 3 項目である。

将来の進路に関する悩みについては、親が相談先として最も上位に挙げられているのに対し、人間関係に関する悩みは親子関係を除いては友人に相談する割合が最も高い。その一方、本研究が注目している SC は、人間関係に関する悩みのほうがやや利用率が高いものの、全般的に低調である。また、学校による利用度の差がないことから、SC の存在の認知や利用には学校

間の格差はほとんどないといえる。

このSCの利用度の低さは何を物語るのだろうか。それは伊藤（2005）が指摘するように、カウンセリングの何たるかを理解しないまま社会が勝手に期待を寄せてしまい、カウンセラーたちは的外れな形で時代の役割モデルへと祀り上げられてしまったことにあると考えられる。

つまり、SCの活動内容の成否については、ほとんど問われることもないままに、一方で子どもの諸問題の解決や問題発生の防止・予防を「こころ」に求めようとする心理主義化した社会があり、もう一方でその社会の期待に応えようとして、SCが《有用な人材》として注目され、学会や大学を中心に彼らの専門性を高め、学校に相次いで導入されていった。社会とSC（プロパガンダとしての学会やその養成機関としての大学も含めて）との間で、有用性や実効性についての議論や実証が不十分なままに、問題の解決と予防・防止だけを目的に、ただ共依存の関係のみが構築されていたに過ぎないと言えるのではないか。

以下、それぞれの項目に「悩みがある」と回答した者のみを対象に、a）それぞれの悩みのなかで相談先として挙げられている上位1項目、b）「誰にも相談しない」（以下「相談せず」）、c）カウンセラーの3変数に注目して、相談先として挙げられている場合を1、挙げていない場合を0とする従属変数として、それを規定する要因をロジスティック回帰分析で明らかにしよう。ただし、先生との関係の悩み・相談先は「友人」「相談せず」「カウンセラー」のいずれの分析においても、χ^2値やp値を見ても、モデルとしては適当ではないうえに（p＞.05）、統計的に有意な変数が皆無であったため、分析・考察については省略した。

〔表-7〕「将来の進路」の相談先の規定要因（ロジスティック回帰分析）

	a）親 B	b）相談せず B	c）カウンセラー B
独立変数			
男性	0.474 *	-0.028	0.814
学力（わからない）			
わかる	1.148 **	-0.973 *	2.038
だいたいわかる	0.718 ***	-0.416 *	0.061
公立中	0.617 *	-0.778 *	-18.070
地域（町村）			
大都市	0.018	0.153	-0.992
市部	0.131	0.364	15.886
おしゃべり友（7人以上）			
0～3人	0.316	0.172	2.156
4～6人	-0.095	0.472	1.655
悩み相談友（4人以上）			
0～1人	-0.491	0.975 **	-2.803
2～3人	0.151	0.170	-1.092
親と話す時間（60分以上）			
0～10分	-1.557 ***	0.966 **	0.704
10～30分	-0.667 **	0.655 *	-16.823
30～60分	-0.372	0.084	-0.892
心理主義的知（3点以上）			
0点	-0.439	1.698	17.639
1点	-0.388	1.674	16.910
2点	-0.658	1.739	17.101
切片	0.218	-3.107 **	-20.191
-2対数尤度	759.866	615.662	50.331
サンプル数	626	626	626

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

（2）　将来の進路に関する悩みの相談先の規定要因

a）親に相談する者に注目してみよう〔表-7〕。明らかなのは、女子よりも男子で、また学力が高く、将来の進路に悩んでいる者が親に相談する傾向があるといえる。学校種別においては、私立よりも公立中学校に通うもののほうが親を相談先に選んでいる。また、人間関係の変数に注目すると、当然のことながら、親と話をする時間の少ないものは親を悩みの相談先としては選ばないのである。

b）「相談せず」の分析結果は親に相談する者と対照的な結果が得られた。たとえば、性別が統計的に有意ではなくなる一方、学力面では「授業内容がよくわかる」者や「だいたいわかる」者の場合で「相談しない」というオッズは低くなる（誰かに相談しているものとおもわれる）。その一方で、悩みを相談する友達が少ない場合や親と話す時間が多くないものは「誰にも相談しない」確率が高まる。

カウンセラーについては属性や人間関係別に見ても特定の傾向は窺い知ることはできない。

（3）　現在の成績に関する悩みの相談先の規定要因

相談先をa）友達としている場合の分析結果を見てみよう。悩みを相談する友達が少ない場合（0～1人）、当然のことながら友達に相談

〔表 - 8〕「現在の成績」の相談先の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	a）友達 B	b）相談せず B	c）カウンセラー B
男性	-0.025	-0.029	2.473
学力（わからない）			
わかる	-0.268	-0.679	4.217 **
だいたいわかる	0.102	-0.141	0.253
公立中	0.276	-0.791 **	-17.245
地域（町村）			
大都市	0.42	-0.22	0.468
市部	0.086	0.463	16.009
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人	0.063	0.374	-1.073
4 ～ 6 人	0.438	0.137	1.050
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人	-1.100 ***	0.806 *	0.266
2 ～ 3 人	-0.537 *	0.219	1.491
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分	0.186	1.006 ***	0.139
10 ～ 30 分	0.632 *	0.409	-19.539
30 ～ 60 分	0.309	0.272	-2.347
心理主義的知（3 点以上）			
0 点	-1.047	2.088 *	18.285
1 点	-0.906	2.243 *	16.343
2 点	-0.805	2.126 *	16.448
切片	-0.461	-3.092 **	-23.921
- 2 対数尤度	745.829	755.347	45.538
サンプル数	665	652	665

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

〔表 - 9〕「友人との関係」の相談先の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	a）友達 B	b）相談せず B	c）カウンセラー B
男性	0.103	0.196	-0.183
学力（わからない）			
わかる	-0.528	-0.689	1.402
だいたいわかる	-0.378	0.144	-0.395
公立中	0.434	-0.022	0.444
地域（町村）			
大都市	-0.701	0.750	0.384
市部	-0.489	0.556	-0.510
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人	-0.142	0.061	1.032
4 ～ 6 人	0.047	0.057	-0.841
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人	-1.837 ***	1.672 ***	-0.923
2 ～ 3 人	-0.556	0.594	-0.393
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分	-0.804	1.151 *	0.789
10 ～ 30 分	0.376	0.715	-0.986
30 ～ 60 分	0.286	0.585	-0.848
心理主義的知（3 点以上）			
0 点	-0.814	0.875	17.927
1 点	-0.595	0.726	18.311
2 点	0.133	0.584	-0.560
切片	1.426	-3.434 **	-21.032
- 2 対数尤度	324.414	318.54	69.959
サンプル数	280	280	280

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

することはしない（おしゃべりをする友達との関連性はみられない）、親と話す時間も 10 ～ 30 分程度の場合に限って、友達に相談する傾向がある。親と話す時間がないわけではないが、十分な時間がとれないものにとっては、身近な他者である友人に相談する傾向があるのだろう。

b）「相談せず」の場合、公立中学校に通うものよりも私立中学校に通うものほど、約 2 倍（2.20）の確率で相談しない。性別・学力・地域などの属性に関する諸変数は直接関係ない。また、悩みを相談する友達が少ない者や親と話す時間が少ないものほど、「相談せず」の確率が増える。心理主義的知識はどの場合でも統計的に有意だが、最も大きいのは「1 点」のもので、1 点のものはそれ以外のものに比べて 9.24 倍の確率で「相談しない」のである。

カウンセラーについても、ほとんど統計的に有意な変数はないが唯一、学力の高いものがカウンセラーのもとに相談に行っている。そのオッズ比は 67.8 と非常に高く、学力差がカウンセラーに相談に行くことを規定しているほぼ唯一の変数である。

（4）　友人関係に関する悩みの相談先の規定要因

〔表 - 9〕によれば、a）友達、b）相談せず、c）カウンセラーのいずれの相談先についても、諸属性（性別・学力・学校種別・地域）との関連はみられない。友人との悩みに関しては、やはり友人関係、なかでも「悩みを相談する友達」が少なければ（0 ～ 1 人）、それだけ友達に相談する確率も小さくなり（オッズ比 0.16）、その場合は逆に「相談せず」のオッズが上昇する（5.32）。また、親と話す時間が短い場合も、友人関係についての悩みは相談しない傾向があるといえる。かりに友人に関する悩みを抱えていても、悩みを相談できる友人の存在や親などを含めた他者と十分なコミュニケーションをとる機会がなければ、結局のところ「相談せず」のままなのである。

（5）　親子関係に関する悩みの相談先の規定要因

親子関係に関する悩みの相談先は、〔表 - 10〕に示したとおりである。まず、「相談せず」はそもそもロジスティック回帰分析のモデルとしては適当ではない（χ^2値＝ 10.505　d.f. ＝ 16　p 値＝ .839）。また、「カウンセラー」の場合

〔表 - 10〕「親子関係」の相談先の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数	b）相談せず B	a）友達 B	c）カウンセラー B
男性	0.269	-0.989 *	2.555
学力（わからない）			
わかる	-1.388	0.915	4.367
だいたいわかる	0.642	-0.136	0.159
公立中	-0.029	0.856	-18.331
地域（町村）			
大都市	0.246	-0.830	1.122
市部	0.262	-1.069	0.957
おしゃべり友（7人以上）			
0 ～ 3 人	0.841	-0.289	-0.964
4 ～ 6 人	0.348	0.411	-0.023
悩み相談友（4 人以上）			
0 ～ 1 人	-0.169	-1.459 *	-0.253
2 ～ 3 人	0.157	-0.717	0.659
親と話す時間（60 分以上）			
0 ～ 10 分	0.092	0.835	-1.530
10 ～ 30 分	0.277	0.508	-18.891
30 ～ 60 分	0.263	1.199 *	-18.497
心理主義的知（3 点以上）			
0 点	-0.939	19.705	20.701
1 点	0.293	19.125	20.033
2 点	-0.947	20.424	2.253
切片	-0.342	-19.728	-24.298
- 2 対数尤度	213.975	166.602	16.700
サンプル数	168	168	168

注）***p< .001　**p< .01　*p< .05　変数の後の（　）内はリファレンスのカテゴリー。

の分析モデルも 5 %水準で有意ではあるが（p ＝ .032 ＜ .05）、全独立変数について有意水準 5 %未満の統計的な関連性が見られなかった。カウンセラーに相談に行くかどうかは属性や人間関係あるいは心理主義的知識のいずれも関係ないことが明らかである。

親子関係の悩みについて、友人に相談する場合は男子より女子で 2.7 倍の確率で多い。

先の分析からも明らかであるが、悩みを相談する友達が少ない場合は、友達には相談しない（できない）確率が高まる。また、親と話す時間が比較的長い者ほど友達に相談する傾向がある。親子関係で悩みを抱えているものにとって、直接親と話し合うことはあまりないだろう。そのため身近な相談先として友人を選んでいる可能性が高いとみるべきだろう。

悩みの相談先は、諸属性よりも悩みを相談する友人の数や親子関係の会話の時間など、周りの人間関係のあり方に規定されている。とりわけ友人間や親子間で発生している人間関係に関する悩みの相談先にその傾向が強い。親や友人は悩みの相談先として上位に挙げられていたが、親との会話時間の長いもの、あるいは、おしゃべりをしたり、悩みを相談する友人の数が多いものほど、親や友人を相談先として選んでいる傾向が著しい。

しかし、逆に言えば、そのような人間関係が構築されていないものにとっては「相談先がない」ことを意味する。この分析結果に対して、SC を含めた「心の専門家」たちは以下のように指摘するかもしれない ――《悩みを相談できない状況こそ問題であり、だからこそ SC の役割があるのだ。もっと学校では SC の存在を児童・生徒たちに理解・周知してもらえるよう徹底してほしい》と。しかし、相談したくない個人的な問題や悩みは誰にでもある。ましてや思春期の中学生ならなおさらのようにおもわれる。

SC を相談先に選ぶ生徒の割合は、本調査を含めた各種調査などを通じて、非常に低いことが明らかになっている。そもそも親子関係・友人関係が十分に構築していない（できない）生徒が SC や相談室に向かうのか、そのような生徒を SC が十分にフォローできるのかどうか、大いに疑問が残る。相談する相手がいないことを理由に、SC が生徒に対して悩みの告白を強いることは問題の深化・拡大の「予防」を意図したものであり、それもまた個人の内面に対する介入・操作にほかならない。

また、カウンセラーの利用は心理学的な知識の有無と直接関係があるとはいえない。このことは、心理還元主義は心理学の知識の有無とは関係なく、学歴を媒介とする擬似相関であることを実証した保田（2007）の議論を補強するものであるといえる。4 つの悩みのうち、現在の成績に関する悩みのみ学力との有意な関係が見られたが、そのことを示唆しているのではないだろうか。ただし、一連の分析結果が示唆しているように、心理還元主義と学力（学歴）との関係は悩みの種類によっても異なるといえるだろう。

4．結　　論

本研究は中学 2 年生を対象とした質問紙調査

から、悩みの相談とその相談先について、心理主義的な行動の点から明らかにした。SC が投入される予算額に比して、ほとんど利用されていない実態とともに、「悩み」を持つものの場合、友人や親、教師といった身近な存在が相談相手になっている場合が多い。それぞれの「悩み」は一見すると個人的な問題に見える。しかし、実際はそうではなく、「問題」は個人と社会、あるいは個人と周囲の人たちの関係性のなかに立ち上がり、その関係性を問い、変えていこうとすることによって解決に至ると考えたほうがむしろ自然であろう。本研究で明らかにされたように、悩みを持つ中学生が友人、親、教師といった周りの「社会」とのつながりで、問題の解決を志向・実践していることにもよく表れている。しかし、属性別に見ると、学業成績の芳しくない中学生は悩みを抱えているものの、相談先がないのが実情である。心理主義的意識や実践から最も馴染まない中学生にとって SC さえ縁遠い存在になってしまっているのである。ただし、そうかといって、悩みを抱える者がすべての悩みを誰かに相談する必要はないし、そうすべきでもない。仮にそれを推し進めれば、他者による内面操作の危険を伴うものでさえあるだろう。

本研究における分析結果はすべての中学生が必ずしも心理主義化していることを意味するものではない。むしろ大人を含めた社会全体の心理主義化が問題なのかもしれない。現代の一部の子どもたちの凶悪犯罪、いじめや不登校など様々な逸脱行動や教育病理が発生するたびに、その要因を「個々人のこころ」のあり方に求め、その要因を予防・除去・治癒する医療化のモデルに立つとき、そこには個々人をとりまく社会的背景への視線が見失われていくことになるのではないか。逸脱行動を起こす可能性のある者についても、その原因が「こころ」にのみ求められ（他の要因はほとんど省みられず）、予防と再発防止に向けられた一方的な「治療」が行われるようになってしまうだろう。

その結果、何らかの「問題」を抱えるものの多くは、その問題を自己＝私個人の問題としてのみ見てしまい、自らを責めることが多い。そういう個人に対して、マニュアルやカウンセラーあるいは心理テストを通じて「こころ」の重要性を内面操作し、問題を個人に還元し、自己責任として転化してしまう危険性をはらんでいる。カウンセリングの結果、それでもなお問題解決に至らなければ、「それはあなた個人が他者の『こころ』に対する理解不足である」と問題の原因や要因を個人に押し付け、その結果として個人の自助努力と自己責任がさらに期待される。

すなわち、心理主義化する社会において、個人の感情・内面・「こころ」の重視は、個人が自己解決や自己実現の力を高め、自己管理能力をつけ、自己責任を負うための自己教育力を求めることになる。そして「こころ」を過度にする思考・実践様式や問題解決の方法は、社会構造上の諸問題（ジェンダー問題や階層問題）も含めて、個人の責任・問題（自己責任）に帰着させる傾向を強めてしまい、弱肉強食の自由競争と社会的不平等や格差の拡大を招く可能性さえある。

そうした「閉じた自己」の問題を抜け出すひとつの鍵として、個人が追い詰められているイデオロギーから引き離し、自己や自己と社会との関係を再構成する条件である「メタ・ライフ・ポリティクス」（荻野 2006）の確立が挙げられる。そもそもギデンズ（Giddens, Anthony）が提唱した「ライフ・ポリティクス」とは、搾取・不平等・抑圧からの解放を目指し、正義・平等・参加を通じて自律の獲得を目指す従来の政治である「解放のポリティクス」と区別されるもので、それを含めて「人生をいかに生きるべきか」という道徳的・倫理的問題に対して選択とライフスタイルを通じて自己実現の権利を主張する政治を指すものである（Giddens, A 1991 = 2005 訳）。しかし、選択や自己実現の機会・可能性は万人に等しく配分されておらず、荻野は「ライフ・ポリティクス」の弱点あるいはそれに向かう前提として、個人的な模索や試行の過程を保証するイマジナリーな領域へ

の権利要求やそのための実効的な社会条件の構築の必要を論じるうえで「メタ・ライフ・ポリティクス」が必要だという。たとえば「悩み」にしろ「友人関係」にしろ、うまくいかない状態を自己の「こころ」の問題として責める個人に対して、自己決定に向けて、「他者」（中学生であれば主な相談先として挙げられた友人や親など）からサポートを受けつつ、自らが能動的に自己アイデンティティを構築し、ライフスタイルを選択できる条件整備が求められてこよう。つまり、自己がイマジナリーな領域において社会との関連で、傷ついた自己の主体性を回復する「前提」が求められている。それはまた「心理（学）主義」というポリティクスから人びとを解放し、それとは別のライフスタイルを再構築する契機となるだろう。

〈付記〉本研究は、平成 17 年～ 19 年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究（B）「心理主義化する現代日本と子どもたちの人間関係の現在」（研究代表者・小針　誠／研究課題番号 17730486）による研究成果の一部である。

註

1　そのほか森真一によれば、社会の心理主義化とは「さまざまな社会現象を個人の心理から理解する傾向や、自己と他者の『こころ』を大切にしなければいけない価値観、そのために必要な技法や知識が、社会のすみずみに行き渡って」いく過程であり、「現代日本を特徴づける一つの『生活態度（エートス）』」（森 2000：15）を指す。

2　SC は、（財）日本臨床心理士資格認定協会による臨床心理士の資格取得者、精神科医、心理学系の大学教員（専任）などのいずれかの要件を満たす者に資格が与えられる。

3　平成 7 年度から 12 年度の間は「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」と呼ばれていたが、13 年度以降「スクールカウンセラー活用事業補助」となった。それまでの「調査・研究」から「活用・実践」に重点がシフトした結果であるといえる。

4　これは、都道府県教委などがカウンセラー等を活用する際に、国が 2 分の 1 以下の範囲で財政支援をするという制度である（国の補助金以外は各自治体の負担ということになる）。そのため、自治体の財源の多寡によって配置率が異なり、100％の自治体は千葉、東京、神奈川、京都、大阪、兵庫などの大都市に集中する一方、低い自治体は北海道、秋田、宮崎などであり、「地域格差」を指摘する声もある（産経新聞 2006. 12. 28）。

5　文科省の追跡調査（http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/03082902/013.pdf）によれば、SC 導入校は全国平均と比較して校内暴力や不登校が減少するなどの効果が見られるという。平成 12年度の SC 配置後から 2 年後の経年調査の結果、校内暴力は全国平均 15.5％減に対して導入校 19.8％減（▼ 4.3％）、不登校も全国平均 2.4％減に対して導入校 4.0％減（▼ 1.6％）と「大幅に減少している」という。しかし、この違いが果たして「大幅減」と言い切れるのか、導入校で積極的な SC の利用・活用が見られたのかなど、慎重に検討すべき課題は残されている。

6　なお、本調査研究の概要については、加藤・小針・木村（2008）に詳しく紹介されている。

7　調査対象校のいずれもが、カウンセラーの受け入れに関して、文科省が原則として提示した「一校につき週 2 回、1 回 4 時間、年間 35 週。2 年間委託」を実施している。

8　SC の研究委託校が全国平均を上回ってきた「SC 先進地域」でさえ、その利用率・担当率は低い。たとえば、2000 年に SC 先進地域・兵庫県が実施したスクールカウンセラー 104 名（有効回答数 73）を対象とした調査によれば、これまでにいじめ問題で児童生徒のカウンセリングを担当したことのない SC は54％（41名）、暴力行為についても児童生徒のカウンセリングを担当したことのない SC は 74％（56名）にも上ることが明らかにされている（兵庫県立教育研修所 心の教育総合センター 2001）。

〔引用文献〕

阿部真里子（1998）「スクールカウンセラーの立場から ― 2 」氏原寛・村山正治編著『今なぜスクールカウンセラーなのか』ミネルヴァ書房 45 - 66 頁。

ベネッセ総研（2001）『モノグラフ中学生 VOL. 70 中学生の悩み』ベネッセコーポレーション。

Giddens, Anthony., 1991, *Modernity and self-identity self and society in the late modern age*, Polity Press（＝秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 2005訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社）。

兵庫県立教育研修所 心の教育総合センター（2001）『スクールカウンセラー、さらなる活用に向けてⅢ―スクールカウンセラーと児童生徒の問題行動―』平成 12 年度スクールカウンセラー研究連絡会報告書。

伊藤茂樹（2005）「学校教育における心理主義 ― 批判的検討 ―」『駒澤大学教育学研究論集』第 21 号 5 - 18 頁。

加藤隆雄・小針　誠・木村祐子（2008）「中学生における心理主義的意識と友人関係」『アカデミア 自然科学・保健体育編』第 14 巻（通巻第 293 集）南山大学 15 - 29 頁。

小沢牧子（2002）『「心の専門家」はいらない』洋泉社新書。

小沢牧子・中島浩籌（2004）『心を商品化する社会「心のケア」の危うさを問う』洋泉社新書。

森真一（1994）「社会的世界としての精神分析世界 ― そのパースペクティブをめぐる考察 ―」日本社会学会・編『社会学評論』第 46 巻第 25 172 - 187 頁。

―――（2000）『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』講談社。

荻野達史（2006）「新たな社会問題群と社会運動 ― 不登校、ひきこもり、ニートをめぐる民間運動 ―」日本社会学会・編『社会学評論』第 57 巻第 2 号 311 - 328 頁。

保田直美（2007）「JGSS - 2005 にみる日本の心理主義 ― 心理学知識と心理還元主義の擬似相関 ―」『日本版 General Social Survey 研究論文集 6 JGSS で見た日本人の意識と行動』119 - 130 頁。